

日本社会福祉学会春季大会シンポジウム

三浦文夫の社会福祉経営論と計画 —社会福祉計画論の視点からの検証と継承—

立教大学池袋キャンパス11号館AB01教室

2016年5月29日

和 気 康 太

(明治学院大学社会学部社会福祉学科)



MEIJİ GAKUİN UNİVERSİTY
明治学院大学

故三浦文夫教授ご遺影



故 三浦文夫教授

(1928年～2015年)

- ・元日本社会事業大学
学長
- ・元日本社会福祉学会
代表理事（会長）
- ・元日本地域福祉学会
会長



MEIJİ GAKUİN UNİVERSİTY
明治学院大学

故三浦文夫教授ご略歴

1928年（昭和3年）台湾に生まれる。1946年に日本へ引き揚げ、旧制第二高等学校を経て、東京大学文学部社会学科卒業。同大学文学部大学院（旧制）修了。1954年に中部社会事業短期大学（後の日本福祉大学）専任講師。同大学助教授を経て、1965年から特殊法人社会保障研究所に勤務。1967年、同研究所部長。1981年より日本社会事業大学教授。1991年から1995年まで同大学学長。退任後、武蔵野女子大学特任教授などを歴任。この間、日本社会福祉学会代表理事（1974年～1977年）、日本地域福祉学会会長（1990年～2002年）、厚生省社会福祉関係審議会委員（1975～1996年）などを歴任。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

故三浦文夫教授ご業績

- ・三浦文夫編『社会学講座15・社会福祉論』東京大学出版会、1974年。
- ・三浦文夫『社会福祉経営論（序説）』碩文社、1980年。
- ・三浦文夫『社会福祉政策研究－社会福祉経営論ノート』全国社会福祉協議会、1985年。
- ・三浦文夫『増補・社会福祉政策研究－社会福祉経営論ノート』全国社会福祉協議会、1987年。
- ・三浦文夫『高齢化社会ときみたち』岩波書店、1988年。
- ・三浦文夫『社会福祉政策研究－福祉政策と福祉改革－』全国社会福祉協議会、1996年。
- ・三浦文夫『社会保障』ぎょうせい、2000年。他多数



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

本報告にあたって（1）

・三浦文夫先生とのかかわり

私は、今回のシンポジウムに登壇される先生方よりも一世代若い研究者である。そのため、故三浦文夫先生（学会の通例により故および敬称は以下、省略する）から直接、薰陶を受けたことはない。私は大学院を修了し、日本社会事業大学社会事業研究所に研究助手として勤めることになって以降、アメリカへ留学するまでの間、足かけ4年間にわたって、主に基礎自治体（東京都世田谷区など）での福祉政策の立案や、福祉計画の策定などの仕事を一緒にさせていただくながで、いわば「実地指導」を受けながら、社会福祉経営論を学んだ研究者である。したがって、正直、今回のシンポジウムへの登壇も逡巡するものがあったが、一世代若い研究者から三浦文夫がどう見えるのかについて報告することにも、学会としてはそれなりの意義があるかもしれないと思い直し、お引き受けすることにした。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

本報告にあたって（2）

・三浦文夫先生とのかかわり

もうひとつ、三浦文夫との関わりについて述べておくと、私は大学院生の時代に全国社会福祉協議会で開催された「三浦文夫氏との対論」（1988年）というシンポジウムに参加する機会があった。現在の明治学院大学に奉職した後、しばらくしてから私は、学会の「政策・理論フォーラム」の企画委員を拝命し、その際、わが国における社会福祉政策研究をより一步進めるため、上記のようなシンポジウムを学会でできないかと考え、当時、第一線で活躍されていた福祉政策の研究者の方々に参考文献を送り、フォーラムを開催した。ただ、いまそのフォーラムの記録を読み返してみると、「社会福祉計画」の視点からの報告はなされていなかったので、本報告ではその部分について、企画委員であった私が報告をすることにしたい。

<参考文献>

小林良二他編『福祉政策学の構築』全国社会福祉協議会、1988年、日本社会福祉学会編『社会福祉学』第49巻第1号、2008年。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

1. 三浦文夫の福祉思想と政策・計画論

- ・「合理的な技術こそが社会を変え、時代を動かす」。

・ 司馬遼太郎

「歴史を書いて（より良い）歴史を作り出す」。

★『竜馬がゆく』『翔ぶが如く』『坂の上の雲』などの、膨大な作品群によって知られる国民作家。先の大戦での自らの悲惨な体験をもとにした強いメッセージが作品に込められていて、それを読んだ読者が感銘し、新たな歴史を作り出す。その歴史観は、「司馬史観」と呼ばれる。文化勲章受章。

・ 三浦文夫

「政策を研究して（より良い）政策を作り出す」。

★三浦文夫の社会福祉政策論が現実に対して“開かれた”理論体系になっていて、それを読んだ人たちが共鳴し、新たな政策を作り出す。→＊それまでにいない、新しいタイプの社会福祉政策の研究者として、1970年代以降、われわれの前に立ち現れた。その理論は、現在に至るまで、わが国の社会福祉政策論に強い影響を与えている。⇒＊ニード規定型社会福祉政策論



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

三浦文夫の「三相」の顔

・ 三浦文夫の「三相」の顔

「“われわれ”的世代からみると、三浦先生には福祉の①思想家、②理論家、③実践家という「三相」の顔があったように思います。

そして、先生の場合、この三相の顔がさながら『三位一体』となって、その折々にわれわれの前に立ち現れるため、なかなか全体像をとらえにくく、それゆえに幅広かつ懐の深い、魅力的な研究者となっています」。（出典）『故三浦文夫先生偲び草』2015年、32頁。

★三浦理論の検証には思想と理論、理論と実践、実践と思想の相互関係を見ていく必要があるのではないか？



※では、三浦文夫の福祉思想とはなにか？

三浦先生の膨大な研究業績を検証しても、正面から（自らの）福祉思想について語ったものはない。（禁欲的であった？）



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

三浦文夫の福祉思想

・ 三浦文夫の福祉思想

「草の根民主主義」(Grassroots Democracy)

「社会改良主義」(Social Reformism)

* 三浦文夫の膨大な著作・論文などの「底流」にはやはり福祉を通して、戦後の日本社会をより良くしたいという想いがあったのではないか。そして、そこにはやはり若き東京大学の学生時代に取り組んだセツルメント活動と、それを支えた「草の根民主主義」と「社会改良主義」の思想、すなわち、この社会は“われわれ一人ひとり”的力でより良いものにすることができるという強い信念があったのではないかと思う。

→ * 社会福祉政策・計画論にも影響？ / 体制還元論的な立場は取らない。/ 合理主義者・現実主義者/命令的計画ではなく、指示的計画にも存在意義を見い出す。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

三浦経営論への批判（1）

・ 三浦批判の論点

<論点>

「資本主義社会の構造的矛盾の所産である、勤労者国民大衆の生活（社会）問題に対する、国家独占資本主義段階における国家の政策である、社会福祉政策の『本質』の探究を放棄し、それを福祉ニードなどという曖昧な概念に置き換えて矮小化している」。

→ * 批判者曰く、「三浦『経営論』は政策技術論である」。

↓

* 「この種の議論も必要であろうが、同時に具体的な政策決定のプロセスとか、組織機構・運営方法、財源のあり方などについての検討と評価が今までほとんどなされていないのも事実である。社会福祉の政策主体をめぐる論議の不毛性は、この辺にも原因があるようと思われる」。（三浦文夫『社会福祉政策研究』全国社会福祉協議会、1985年、13頁）



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

三浦経営論への批判（2）

- このような批判に対して、三浦文夫はほとんど反論らしい反論をしていない。それは当時、一連の「社会福祉改革」が進むなかで、その政策形成に深くコミットしている研究者として不毛な論争を避けたという文脈もある。
- しかし、それと同時にやはり三浦文夫は、政策における「合理的な技術こそが社会を変え、時代を動かす」ということを、おそらく同時代のどの研究者よりも強く認識していたのではないかと思う。したがって、自らの経営論が「政策技術論」として批判されたとしても、「歴史がやがて自らの理論が正しいことを証明するだろう」と考えていたのではないだろうか。
- そして、この合理的な技術のひとつが、本報告のテーマである「社会福祉計画」であり、それは1990年代以降の、社会福祉における“この国のかたち”（司馬遼太郎）を大きく変えたといえよう。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

2. 戦後社会福祉政策論の展開と経営論

- 「現場のない実践など存在しない。福祉政策にもまた現場はある」。
- 戦後社会福祉政策論の展開

戦後の社会福祉政策の展開を一定の期間で見ると、「知識の存在拘束性」（K.マンハイム）の視点からそれぞれの時期に「定説」とされる政策論がパラダイムとして出現し、社会福祉政策研究の方向性を規定する。また、そのなかで社会福祉経営論は、歴史的には第Ⅲ期の1970年代後半もしくは1980年代以降、社会福祉政策研究の有力なパラダイムとなった。その理論には①それ以前の本質論の桎梏からの解放、②政策概念の相対化による形而「下」学的な再措定、③論理実証主義的な研究方法論を基底とした政策科学（policy science）志向性という3つの意義がある。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

<参考>第Ⅰ期 社会事業政策論

- 第Ⅰ期・社会福祉政策の特徴（1945年～1959年）
社会福祉の定礎期。憲法25条による生存権保障の理念の確立、生活保護制度を中心とする福祉3法体制。
- 代表的な論者と主要著書
孝橋正一『社会事業の諸問題』ミネルヴァ書房、1954年。
- 社会福祉の定義
「社会事業とは資本主義制度の構造的必然の所産である社会的問題に向けられた合目的的・補充的な公・私の社会の方策の総称であって、その本質の現象的表現は、労働者＝国民大衆における社会的必要の欠乏（社会的障害）状態に対する精神的・物質的な救済、保護および福祉の増進を、一定の社会的手段を通じて、組織的に行うところに存する」。
- 社会福祉政策の目的・主体・対象・政策の可変性
(目的) 資本主義社会における社会的問題の除去・緩和およびその体制の維持存続、(主体) 国家、(対象) 社会的諸問題のなかの社会「的」問題、(政策の可変性) 不可能 (社会政策との関係で他動的・他律的に決定される)



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

<参考>第Ⅱ期 社会福祉運動論

- 第Ⅱ期・社会福祉政策の特徴（1960年～1974年）
社会福祉の拡大期。社会福祉制度の範疇の拡大、福祉六法体制、社会福祉施設の整備、地方自治体の社会福祉単独事業の拡大。
- 代表的な論者と主要著書
一番ヶ瀬康子・真田是編『社会福祉論』有斐閣、1968年。
- 社会福祉の定義
「社会福祉とは、国家独占資本主義期において、労働者階級を中心とした国民無産大衆の生活問題に対する『生活権』保障としてあらわれた政策のひとつであり、他の諸政策、とりわけ社会保障（狭義）と関連しながら、個別的にまた対面集団における貨幣・現物・サービスの分配を実施あるいは促進する組織的処置である」。
- 社会福祉政策の目的・主体・対象・政策の可変性
(目的) 資本主義社会（特に国家独占資本主義期）における生活問題の解決およびその体制の維持存続、(主体) 国家、(対象) 生活問題 *生活問題は政策主体との関係によって規定される、(政策の可変性) 可能 (社会運動あるいは社会福祉運動によって可能と考える)



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

＜参考＞第Ⅲ期　社会福祉経営論

- 第Ⅲ期・社会福祉政策の特徴（1975年～現在〔1999年〕）
社会福祉の転換期・改革期。社会福祉制度の固有領域の拡大・変化、福祉八法体制、地域福祉・在宅福祉への転換、医療・保健との連携。
- 代表的な論者と主要著書
三浦文夫『社会福祉政策研究』全国社会福祉協議会、1985年。
- 社会福祉の定義
「社会福祉経営論は、社会福祉が目的とする人間の自立と社会的統合が妨げられている社会福祉ニードの把握、そしてそのニード充足に必要な方法・手段（サービス）の選択の決定、さらにこれらのサービスの円滑な推進・展開のために必要な資源の調達、確保等を主要な課題とする」。（＊）
- 社会福祉政策の目的・主体・対象・政策の可変性
(目的) 人間の自立の確保と、社会的統合を高めること、(主体) 多元的主体(国、地方自治体だけでなく、民間機関・団体も含む)、(対象) 社会的ニード(特に集合的ニード、非貨幣的ニードを対象とする) (政策の可変性) 可能(政策提言あるいは計画策定によって漸進的に可能と考える)



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

社会福祉経営論の特質と計画

・社会福祉経営論の特質

社会福祉経営論は、その理論的特質からの帰結として、社会福祉政策（計画）の「現場」の変革を射程に入れた「技術論」であり、実践志向の理論体系となっている。

→＊「ここでいう政策というのは、場合によっては『計画』といい直してもよい」（三浦文夫『社会福祉政策研究』全国社会福祉協議会、1985年、50頁）というように、その内部には「漸進的社会工学（piecemeal social engineering）」（K.ポパー）の視点にもとづく、「計画」のロジックが組み込まれていたと考えられるが、それはある意味、地方分権、そして「地域福祉」の時代の要請でもあった。つまり、基礎自治体には福祉を推進していくための方法・手段が必要になっていた。⇒＊社会福祉計画の必要性が高まっていた。

＜参考文献＞

和氣康太「戦後社会福祉政策論の展開—社会福祉経営論の歴史的意義を中心として—」日本社会事業大学編『社会福祉システムの展望』中央法規出版、1997年。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

3. 社会福祉経営論と計画論

- ・「社会福祉政策は過去に規定されると同時に未来にも規定される」。
- ・社会福祉計画研究の嚆矢

三浦文夫「社会福祉と計画—社会福祉の計画のために検討すべき若干の問題—」社会保障研究所編『季刊社会保障研究』東京大学出版、第8巻第4号、1973年。

(内容)「社会福祉施設緊急整備5ヵ年計画」(1970年)などの、主に国レベルの計画を議論の素材として、社会福祉施設整備計画と社会福祉マンパワー計画などについて論及している。



* 社会福祉計画による社会開発 (Social Development) を提起した論考として、今日でもその「先見性」を高く評価できる論文である。(計画論としては、開発計画の類型に位置づけられる)



MEIJIGAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

社会福祉計画論の動向（1）

・ 1980年代の社会福祉計画論

* 三浦論文以降、若干のタイムラグがあるものの、1980年代に入ると、社会福祉計画論に関する研究が次第に見られるようになる。

<例> 高田真治『社会福祉計画論』誠信書房、1979年、京極高宣『市民参加の福祉計画』中央法規、1984年、など。

・ 社会福祉計画の基礎研究としてのニーズ推計

* 1980年代に入ると、社会福祉計画の基礎研究としての「ニーズ推計」などの技法の研究開発 (Research & Development) が、社会保障研究所や、東京都老人総合研究所などの研究グループを中心にして進められた。

→ * その研究成果は、1989年の「社会福祉関係八法改正」で法制化された「老人保健福祉計画」に導入され、わが国において社会福祉計画が実体化したことはよく知られている。



MEIJIGAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

社会福祉計画論の動向（2）

・ 戦後の社会福祉計画の歴史

戦後の社会福祉計画の通史的特徴

第Ⅰ期 萌芽期（1945年～） 第Ⅱ期 試行期（1960年～）

第Ⅲ期 展開期（1975年～） 第Ⅳ期 確立期（1990年～）

→ * 第Ⅲ期の展開期と、第Ⅳ期の確立期にかけて、最も大きな影響力をもったのが、三浦文夫の社会福祉経営論であった。つまり、社会福祉経営論において理論的に示された「ニーズ論」「サービス論」「資源論」という枠組みがあって、はじめて社会福祉計画は理念計画ではなく、基礎自治体レベルでの実施計画までも視野に入れた「実現可能性」(feasibility) の高い計画になったといえる。

<参考文献>

和氣康太「社会福祉計画の歴史」定藤丈弘・坂田周一・小林良二編『社会福祉計画』有斐閣、1996年、29頁～44頁）など



MEIJIGAKUIN UNIVERSITY

明治学院大学

＜参考＞戦後社会福祉計画の歴史（1）

- ・ 第Ⅰ期は、戦後の復興期であり、社会福祉の最大の課題は、国民の大多数の生活を脅かしていた貧困問題であった。そのため、社会福祉は、公的扶助である生活保護法を中心に、児童福祉法と身体障害者福祉法を加えた福祉三法で行われていた。この時期には「社会保障5カ年計画」（1955年）などのような社会保障に関する構想計画がいくつか策定されたが、社会福祉計画時代はそのなかに組み込まれており、独自の制度としては成立しなかった。
- ・ 第Ⅱ期は、高度経済成長期であり、社会福祉は福祉三法に精神薄弱者福祉法（現在の知的障害者福祉法）、老人福祉法、母子福祉法（現在の母子及び寡婦福祉法）を加えた福祉六法へとその範疇を拡大した。この時期には国の経済計画に対応して、厚生省が「厚生行政の課題」（1964年）などの厚生行政に関わる計画を策定している。また、社会福祉の領域での計画としては「社会福祉施設緊急整備5カ年計画」（1971年）が策定されている。さらに、この時期には東京都が「東京都中期計画」（1968年）を策定し、シビル・ミニマムの概念や、ローリング・システムの採用などで全国の注目を集めた。そして、1969年には地方自治法（第2条・第5項）の改正によって、基本構想の策定が各地方自治体に義務づけられた。



MEIJIGAKUIN UNIVERSITY

明治学院大学

＜参考＞戦後社会福祉計画の歴史（2）

- 第Ⅲ期は、高度経済成長が終焉し、日本社会が安定成長へと移行した時期である。それに伴って、社会保障・社会福祉は「拡大から抑制へ」と大きく変化した。この転換を象徴するのが、1979年に策定された「新経済社会7カ年計画」である。この時期には国レベルでの社会福祉計画は策定されていないが、神奈川県や神戸市などの地方自治体が先駆的に計画を作成し始め、社会福祉協議会も在宅福祉サービスとの関連で「地域福祉計画」の策定に取り組み始めた。また、東京都では1989年に東京都が地域福祉推進計画、区市町村が地域福祉計画、区市町村の民間団体（社会福祉協議会など）が地域福祉活動計画を策定するという「三相計画」の考え方が出され、それ以降、東京都の区市町村で計画の策定が進められた。さらに、この時期には「国際障害者年行動計画」（1980年）や「高齢者問題国際行動計画」（1982年）など、障害者や高齢者による行動計画も策定されている。
- 第Ⅳ期は、「高齢者保健福祉推進10カ年戦略」（ゴールドプラン）が策定され、1999年までに実現すべき高齢者保健福祉サービスの目標値が示された。さらに、社会福祉関係八法の改正（1990年）が行われ、そのなかで各地方自治体に「老人保健福祉計画」の策定が義務づけられたが、この制度



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

＜参考＞戦後社会福祉計画の歴史（3）

改革によって戦後はじめて社会福祉計画が法制化された。その後、新ゴールドプランやゴールドプラン21、あるいはエンジェルプランなどが国レベルで、また「障害者計画」や「児童育成計画」が地方自治体レベルで策定されるようになった。さらに、介護保険制度の導入（2000年）に向けて、1999年には全国の地方自治体で介護保険事業（支援）計画が策定されている。また、2000年の社会福祉法によって、地方自治体の「地域福祉（支援）計画」が法制化され、以後、2003年には次世代育成支援対策推進法が成立して、「次世代育成支援行動計画」が、そして2005年には障害者自立支援法（現在の障害者総合支援法）が成立して、「障害福祉計画」が法制化されている。これによって、社会福祉の主要3分野のすべてで、福祉計画が策定されるようになっている。また、2012年には子ども・子育て関連三法が成立し、新しい「子ども・子育て支援制度」のもとで、2015年4月からの5カ年計画として、都道府県の子ども・子育て支援事業計画と、市区町村のそれが策定されている。

- 戦後の社会福祉計画の歴史の概観：**①経済計画、社会保障計画から社会福祉計画へ、②社会福祉計画から地域福祉計画へ、③中央集権型の計画から地方自治・分権型の計画へ



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

社会福祉計画論の動向（3）

- ・ **坂田周一・小林良二他編『社会福祉計画論』有斐閣、1996年。**
 - * 三浦文夫は、厳密にいようと社会福祉計画論を体系化し、完成させではない。それはむしろ後続の研究者たち（小林良二、坂田周一、平岡公一、冷水豊、故高萩盾男、など）によってなされたといえる。『社会福祉計画』は、1990年代の社会福祉計画論の理論的到達点を示した文献として考えることができる。
- ・ **武川正吾編『地域福祉計画』有斐閣、2005年。**
 - * 『社会福祉計画』の、いわば続編ともいべき、武川正吾編『地域福祉計画—ガバナンス時代の社会福祉計画—』有斐閣、2005年は、21世紀初頭の理論状況を理解できる文献であるといえる。
→ * 本書の内容は、全面的に社会福祉経営論に依拠しているとはいえないところがある。その意味では、現実の「地域福祉計画」は、三浦文夫の想定外のところで制度化されたのかもしれない。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

『社会福祉計画論』



- ・ 定藤丈弘・坂田周一・小林良二編
 - ・ これからの社会福祉 8
 - ・ 有斐閣
 - ・ 1996年
 - ・ 208頁
- ※ 本書は老人保健福祉計画の法制化（1989年）を受けて編集されている。なお、本書は中国語に翻訳されて、刊行されている。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

『社会福祉計画論』の構成

- ・序章 社会福祉計画論の系譜 坂田周一
- ・第1章 社会福祉計画の基礎概念 坂田周一
- ・第2章 社会福祉計画の歴史 和氣康太
- ・第3章 社会福祉計画の類型と構成要素 小林良二
- ・第4章 自治体の福祉計画 大沢隆
- ・第5章 民間機関の福祉計画 牧里毎治
- ・第6章 社会福祉計画と財政 澤井勝
- ・第7章 問題分析と福祉ニーズ 坂田周一
- ・第8章 予測の技術 坂田周一
- ・第9章 福祉ニーズの把握とニーズ推計の技術 高萩盾男
- ・第10章 計画の実施とモニタリング 坂野達郎
- ・第11章 福祉計画におけるサービス評価 冷水豊
- ・第12章 費用-効果分析 平岡公一



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

『地域福祉計画』



- ・武川正吾編
- ・副題は「ガバナンス時代の社会福祉計画」
- ・有斐閣
- ・2005年
- ・257頁

※全国社会福祉協議会の地域福祉計画研究プロジェクト、「社会福祉法」における法制化(2000年)などの動向を受けて編集されている。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

『地域福祉計画』の構成

- 序章 地域福祉計画とは何か 武川正吾
- 第1章 地域福祉の主流化と地域福祉計画 武川正吾
- 第2章 地域福祉計画の概要 武川正吾
- 第3章 地域福祉計画と関連計画 小坂善治郎
- 第4章 地域福祉計画における必要と資源 松端克文
- 第5章 地域福祉計画の策定プロセス 原田正樹
- 第6章 課題の発見と目標の設定 和気康太
- 第7章 住民参加の技法 原田正樹
- 第8章 コミュニティ・ミーティング 小坂善治郎
- 第9章 社会指標と政策評価 三重野卓
- 第10章 地域福祉計画における評価 和気康太
- 第11章 地域福祉計画と財政 山本隆
- 第12章 ガバナンスの時代と地域福祉 澤井勝



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

“余話として”

- 坂田周一他編『社会福祉計画』有斐閣（1996年）と、武川正吾編『地域福祉計画』有斐閣（2005年）の両方に執筆した研究者は、澤井勝先生と和気の二人だけである。私が、この2つの計画論の編集会議に参加した印象としては、前者では三浦経営論の影響を強く感じたが、後者ではそれをあまり感じなかった。
- 地域福祉計画の全社協の研究プロジェクト（和気は作業委員として参加）は、1990年代の後半に始まり、その成果は厚生労働省社会保障審議会福祉部会の審議の素材となつたが、「地域福祉計画」は、それまでの福祉系3分野の計画とは性格が異なることもあり、三浦経営論がベースになっているとはいえないところがある。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

本報告のまとめにかえて（1）

- 三浦文夫は、戦後の社会福祉政策研究の領域にイギリスのソーシャルポリシーの理論（特にリチャード・ティトマスのそれ）を大胆に取り入れ、日本の社会福祉政策の「現実」との対話のなかで、その政策理論の研究・開発を続け、社会福祉政策と、政策研究の領域での「革新」（innovation）を成し遂げた研究者である。

↓

* リチャード・ティトマスは、オイルショックが起きた1973年に亡くなっている。つまり、フェビアン主義者であったティトマスは、福祉国家の「黄金期」の理論家であった。しかし、三浦文夫は、むしろその後の福祉国家の危機とその再編のなかで、社会福祉政策の理論家、実践家として活躍した。したがって、彼の研究は、日本的な文脈のなかで、オリジナリティの高いものになっている。それには三浦文夫が「社会学者」であったことと、1960年代になってから社会福祉（政策）研究に取り組んだことが影響している。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

本報告のまとめにかえて（2）

- 三浦文夫の社会福祉経営論は、1980年代以降、社会福祉政策論のパラダイムとなつたが、その理論的な基盤整備があつて、はじめて1990年代以降の、福祉領域における計画行政（planning administration）特に基礎自治体におけるそれが可能となつた。

↓

* 「高齢者保健福祉推進10カ年戦略」（ゴールドプラン）に始まる、1990年代の国さまざまな福祉プラン、地方自治体の「老人保健福祉計画・介護保険事業計画」「障害者計画・障害福祉計画」、「児童育成計画・次世代育成支援行動計画」などの、社会福祉計画によって、わが国の福祉サービスはこの間、大きく進展した。また、一連の福祉計画に基礎自治体が取り組むことによって、福祉行政の「力量」（問題の認識・発見力や解決力など）も向上した。ただし、これには異論（民営化や市場化などによる当事者能力の脆弱化など）もある。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

本報告のまとめにかえて（3）

- 三浦文夫の社会福祉経営論は、やはり20世紀の福祉ガバメント型の政策・計画理論であり、21世紀の福祉ガバナンス型のそれとはいえないのかもしれない。その意味では、われわれは三浦理論を継承しつつ、あらためて社会福祉政策・計画論の「原論」を再検討・再構築する必要があるのではないか。

↓

* 21世紀以降の社会福祉研究は、管見では一方で福祉政策・計画論と福祉援助・支援論の統合という方向へ向かった。また、その一方で福祉政策自体が、自らを「限定」することなく、関連領域との連携・協働という「拡大」の方向へ向かいつつあることも事実である。近年の生活保護を巡る議論や、「地域包括ケア」の推進などの、一連の政策動向は、その現れであろう。その意味で、あらためて、『社会福祉政策研究』第一部の「基礎理論」を再構成する必要性を感じる。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

本報告を終えるにあたって

- 私は冒頭のところで、学会の政策・理論フォーラムについて述べたが、その長時間にわたるフォーラムの間、三浦文夫先生は、最前列で身じろぎもせず、報告者の報告を聞き、熱心にメモを取っていた。私は、いまでもその光景が目に焼きついていて、思い出すたびに深い感動をおぼえる。70歳を過ぎてなお、社会福祉（政策）研究に誠実に、そして真摯に向き合う姿は忘れることがない。私は、先生の「背中」を見て、多くのことを学んだが、私もまたできるものならば、年をとっても三浦先生のようになりたいと思う。最後に先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

ご清聴をいただき、 どうもありがとうございます ございました！



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学

〈参考文献〉

- ・高田真治『社会福祉計画論』誠信書房、1979年。
- ・京極高宣『市民参加の福祉計画』中央法規出版、1984年。
- ・三重野卓『福祉と社会計画の理論』白桃書房、1984年。
- ・橋本和孝『ソーシャル・プランニング』東信堂、1996年。
- ・坂田周一『社会福祉政策』有斐閣、2000年。
- ・武川正吾『福祉社会－社会政策とその考え方』有斐閣、2001年。
- ・地域福祉計画に関する調査研究委員会編『地域福祉計画の策定に向けて』全国社会福祉協議会、2001年。
- ・小笠原浩一・平野方紹『社会福祉政策研究の課題－三浦理論の検証』中央法規出版、2004年。
- ・牧里毎治・野口定久編『協働と参加の地域福祉計画－福祉コミュニティの形成に向けて』ミネルヴァ書房、2007年。
- ・牧里毎治・野口定久・武川正吾・和氣康太編『自治体の地域福祉戦略』学陽書房、2007年。



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学